

2015 年度

国際文化学部 研究旅行奨励制度 報告書



# 現代イングランドにおける伝統社会の名残を考える

## 「紋章」の普及とその管理を巡る問題を中心に

18AR158 森野椎

研究旅行期間

2016年2月8日～2月23日

## 目次

目次	1
研究旅行の目的	2
期待された成果	2
「紋章」を取り上げる理由	3
イギリスを目的地とする理由	3
研究報告	4
ロンドン	4
[概要]	4
[市内の紋章]	4
ウエストミンスター寺院	6
[概要]	6
[寺院における紋章]	6
紋章院	7
[概要]	7
[紋章院の存続]	7
ギルドホール	8
[概要]	8
[ギルドの紋章]	8
ソールズベリー大聖堂	9
[概要]	9
[イングランド最初の紋章]	9
ウィンザー城	11
[概要]	11
[ガーター騎士団と天皇旗]	11
オックスフォード大学	12
[概要]	12
[カレッジの紋章]	12
テンプル・チャーチ	13
[概要]	13
[初期の紋章]	13
まとめ	14
参考文献	15

## 研究旅行の目的

イギリスを含むヨーロッパ世界を特徴づける多くの事柄の一つとして、独特の身分制社会を維持していた歴史を指摘することができるだろう。その遺産は、近代化に伴って身分制社会が崩壊した現在においても、例えばイギリスの貴族院にみられるように、様々な形でヨーロッパ世界に確実に継承されている。またかつては〈不自由な社会〉として身分制社会が批判的に考えられていたが、近年ではその〈共同体社会〉独自の〈温かい〉人間関係や社会関係を再評価する動きもみられる。

本研究旅行の目的は、中世以来のイングランドにおける紋章の普及とその管理に注目し、同地域における身分制社会の名残、言い換えれば、中世的な伝統社会と近代的な現代社会との融合の姿を考察することであった。具体的には、かつては王侯・貴族の権威を誇示するシンボルであった紋章が、時代の変遷と共に都市、ギルド、大学、教会等々の共同体のシンボルへと変化していく過程を考察し、紋章を通してイングランドが歩んできた中世から現代に至る歴史の捉えなおしを試みた。

## 期待された成果

本研究旅行を通じて期待される成果は、以下の二点であった。

第一に、イギリスの伝統社会において紋章が果たした役割を知ることができた。産業革命以降イギリスには三つの〈階級〉（上流階級・中流階級・労働者階級）があり、その階級差が徐々に曖昧になりながらも現在でも残っているとしばしば言われている。17世紀にイギリス革命（ピューリタン革命・名誉革命）が封建的身分制の廃止と個人の自由を保障する社会を目指して行なわれたにも関わらず、依然と残るその身分意識（階級）の意味を、身分制社会における土地と人とのつながりをシンボル化した紋章の中に見出せることを成果として期待した。

第二に、日本とイギリスの現在の紋章のあり方の違いに注目することで、それぞれの物の考え方の違いなど、両者の特質を抽出できることである。日本での紋章学の発展に大きく貢献した森護によると、紋章とはヨーロッパと日本にのみ存在し、しかも互いに影響を受けることなく発展したという。日本で紋章（家紋）はなじみの薄いものになりつつある一方で、イギリスでは日常生活の中に紋章は溢れている。日本とイギリスの現在の紋章のあり方を比較し、相違点や共通点を探ることで、イギリスと日本、それぞれの特質についての深い考察に繋がることを成果として期待した。

## 「紋章」を取り上げる理由

端的に述べると紋章は社会状況と密接に関わっていることが挙げられる。伝統社会<sup>1</sup>である身分制社会とは〈法の前平等〉原則に立つ近代市民社会より以前の諸社会のことであり、一般的にヨーロッパ史上ほぼ 12～13 から 18 世紀半ばまでの社会の呼称として用いられている<sup>2</sup>。この時期はちょうど紋章が広く普及した時期とほぼ同じだと言われる。紋章の起源は 11 世紀頃のドイツであり、その後フランス、イングランドとヨーロッパ諸国へ広まり 12～13 世紀頃には体系化され、封建制の崩壊で 18 世紀以降衰退<sup>3</sup>したと考えられている。紋章は当初、騎士のしるしであったが次第に文盲の人でも理解できることから王侯・貴族の権威のシンボルとして用いられるようになり、その後 15 世紀頃からは政治的・宗教的権威と結びつき、大学・教会・修道院・都市・ギルドなどの共同体のシンボルとしても用いられ始めた。つまり、紋章はタテ社会のシンボルからヨコ社会のシンボルへと変化したといえる。これは社会発展のプロセスと同じ方向性を持っている。従って、紋章の変遷を辿ることは身分制社会から市民社会への移り変わりを知ることができるといえよう。

また、紋章は戦場で彼我の区別をするために楯に描かれた目印から生まれ、次第に仲間の中でも自己存在を主張するために発達したと考えられている。そして先述したように、紋章の担い手が騎士から王侯・貴族へと変化した。それに伴って紋章のデザインも変化した。そのため、紋章のデザインの変化から同時代状況の理解を深めることが出来る。

以上のことから、紋章の普遍的な定義<sup>4</sup>が「中世キリスト教支配のヨーロッパ貴族社会に始まり、楯にそれぞれ個人を識別し得るシンボルをあしらった世襲的制度」であることを踏まえ、紋章は身分制社会における事象、その後現代に残るものを考察するのに役立つことから紋章を取り上げたいと考えた。

## イギリスを目的地とする理由

紋章の誕生はドイツといわれ、ドイツからフランス、イングランドへと伝わったと考えられている。統一国家としてドイツは歴史が浅く、紋章制度がそれぞれの地域によって異なっている。フランスではナポレオン 1 世が行なった改革によりそれまでの紋章制度が一掃され新たな紋章制度が確立されたが、帝政が倒れると再び元の制度へと戻り、結局新旧の紋章制度が混在するカタチになった。その一方で、イギリスでは紋章制度は整えられ現在でも紋章院が存在する。

また、イギリス全土に古寺・古城にあふれ、国会では貴族院が存続しさらにその給与が無給の名誉職であるなど、具体的な物だけでなく、制度や伝統、法律を継続しており、まさに〈歴史の国〉である。以上の理由からイギリスを目的地とした。

---

<sup>1</sup> 〈伝統〉とはある集団・社会において、歴史的に形成・蓄積され、世代をこえて受け継がれた精神的・文化的遺産や慣習とあり、伝統社会とはそういった〈伝統〉が受け継がれている社会のことをさす。(三省堂『大辞林』より)

<sup>2</sup> 世界大百科事典 第 2 版より

<sup>3</sup> 個人紋章の衰退であり、共同体の紋章のことではない。

<sup>4</sup> 森護によると西洋の紋章学における紋章の定義は紋章学者の数だけあるといわれるほど各様各説である。そうしたなか、数多くある定義を概観して紋章本来の目的にかなう最も普遍的かつ妥当な定義として述べている。

## 研究報告

### ロンドン

#### [概要]

ロンドンは日本よりも高緯度に位置するが、温暖な気候で近くにテムズ川が流れ交通の便が良く環境条件に恵まれた都市である。紀元後 43 年にはすでに人々が住んでいたことが確認され、長い歴史を持っている都市である。5 世紀前半にローマ人が去り、一時は衰退したものの、急速に復興し商業で大いに繁栄した。現在でもイギリスの首都として、政治・経済・文化などあらゆる側面において中心的役割を担っている。特に、戦後アメリカのウォール街にその座を譲ったものの、現在でもなお金融街としてその中枢をなしている。第二次世界大戦中の空襲によって大きな被害を受けたが、市街地に広々とした公園があったり、高層ビル群の中に小さな教会が現存していたりと、建築物からも伝統と歴史が受け継がれていることが伺える。

ロンドン市の紋章は 1380 年もしくは 1381 年に制定されたとされる。ロンドンの守護者セント・ポールの剣とイングランドの守護者セント・ジョージの十字を描いたものである。

#### [市内の紋章]

市内のいたるところに紋章が見受けられ、イギリス人の生活に紋章が身近な存在であることがわかった。歩道に立てられたポールや橋の欄干、街路灯などの公共物のほかに、店の看板やクッキーなどにさり気なく付随しているため注意しなければ見過ごしてしまいそうであった。

ロンドン市内には、王室関係の建物やゆかりの地が多数あることから、ロンドン市紋章だけでなく王室の紋章も多数見受けられた。市紋章が銀と赤の二色でシンプルな印象を受けるのに対し、王室の紋章は赤、黄、青、緑と多彩で目立っていた。

西欧の紋章にはいくつかの細かい規則があり、その中の一つに色の制限がある。具体的には、色には①メタル色、②原色、③毛皮模様の三つのグループがある。①は金(黄)と銀(白)の 2 色で、②は赤、青、黒、緑、紫の 5 色である。③はかつて楯に動物の皮が張り付けられていたこと名残として、アーミンと呼ばれる動物の毛皮を図案化したものである。大原則として、各グループ内の色を重ねてはならない。つまり、金色の下地に銀色のライオンという組み合わせは禁止されているのだ。

このような色の制限は紋章の起源が戦場であることが理由としてあげられる。紋章は、戦場において敵と味方を区別するために楯にしるしを描いたことから発展していった。中世において騎士は視界がかなり悪いヘルメットを着用していたため、判別しやすいように鮮やかな色のコントラストが求められたの。

以上のことを踏まえて、欄干で目にしたイギリス王室の紋章を見ると、多彩のため遠くからは誰の紋章なのか判断し難いように思われた。しかし、色鮮やかであるため、仰々しく立派な紋章であることは遠目からでも瞭然であった。

また、家柄の古い貴族はメタル色と原色の 2 色のみを用いると言われていることから、銀と赤の 2 色使いのロンドン市紋章は紋章学が成立した初期に制定<sup>5</sup>されたことがわかる。

---

<sup>5</sup> 紋章は 11 世紀から 12 世紀に誕生した。

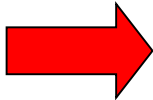
※紋章学に則ると、色は特殊な呼び方があるが、ここでは日常用いる色名で記す。



ロンドン・シティの紋章  
『CIVIC & CORPORATE HERALDRY』



拡大



ロンドン市内にて  
撮影者：森野



## ウエストミンスター寺院

### [概要]

ハイドパークの南東にあるウエストミンスター寺院は 10 世紀に建立され、その後何世紀にも渡り増改築が繰り返されている王室ゆかりの教会である。1066 年にウィリアム征服王の戴冠が行なわれて以来、代々国王の戴冠式がこの寺院で執り行われている。また、国王や王妃をはじめとする英国史上多くの著名な人々の人物が埋葬されていることでも有名である。

### [寺院における紋章]

現在でも信仰を实践する教会として毎時 1 分程度の祈祷が行なわれている。その間は観光客も動きを止め教会全体により厳かな空気が流れていた。思わず背筋を正さずにはいられなかった。ゴシック建築の荘厳な外観は息を飲む美しさであった。内部は外観の端正な整然とした印象とは異なり、ステンドグラス越しに入る暖かな光が心を和ませた。ゴシック建築の特徴である、リブ・ヴォールトや飛び梁の使用により壁は従来と比べ、より薄く、より大きなステンドグラスを用いることが可能となった。ステンドグラスには聖書にまつわるエピソードの場面のほか、教会にゆかりのある貴族の紋章が至るところに描かれていた。天井にも紋章が描かれていたが、凝ったデザインの紋章は肉眼では詳細は確認できなかった。このことから、教会内にある紋章は〈見せる〉ことよりも、そこに紋章を〈残す〉ことが名誉であり重要なことであると思われた。(内部は撮影禁止)



ウエストミンスター寺院

撮影者：森野

## 紋章院

### [概要]

セント・ポール大聖堂の南にある赤茶色の建物が紋章院である。紋章院とは、紋章の認可や紋章係争の裁判等の紋章事務を統括する機関である。中世では各国に紋章院は存在したが、ヨーロッパに現存するのはイングランドの紋章院とスコットランドにあるロード・ライアン・オフィスのみである。紋章は同一国内において同じ紋章は決して許されず、その先有争いは後を絶えなかった。そのため紋章に特化した公的機関が必要とされ、紋章院が1484年に設立された。

### [紋章院の存続]

現存する紋章院は1666年のロンドン大火で焼失した後再建されたものである。300年以上前の建物であるが、長年丁寧に手入れされているせいか古びた印象は受けなかった。残念ながら内部に入ることはできなかった。

紋章を取り巻く状況は中世以来変化しているにも関わらず、紋章院という機関が存続していることは注目に値する。いくらイギリス人が伝統を大切にする国民性であるといえども、不必要なものはやはり淘汰され消えていくだろう。紋章院の存続から依然として紋章が人々を惹きつけ続け、紋章が今も生きていることがわかる。



紋章院  
撮影者：森野



紋章官  
『AN HERALDIC ALPHABET』



## ギルドホール

### [概要]

中世において市民とは政治や経済における特権を保持する自由民をさす。そして、ほとんどの場合、市民とは商工業者の親方であり、彼らは職種毎にギルドと呼ばれる同業組合を形成した。次第にギルドの数は増加し、単に市場を独占する組合から市政に携わる団体へと変化していき、ロンドンの市長は公選ではなく、このギルド関係者だけによって選出される。こういった背景があるため、ロンドン市庁舎はギルドホールと呼ばれている。

### [ギルドの紋章]

シティ・オブ・ロンドン自治体の市庁舎南側にギルドホール・アート・ギャラリーがある。この建物は1999年に立てられかなり新しい。ここでは4000点以上のコレクションの中から常時250点ほど展示してあった。また、地下にはローマ時代の遺跡が展示され、図書館も併設されていた。近くにセント・ポールがあるにも関わらず、金融街の中にあるためか、観光客の数は少なくオフィスワーカーが多いように感じた。

残念ながら有力12ギルドの紋章旗が掲げられているギルドホールの大広間を見学することはできなかったが、併設された図書館で紋章に関する文献をいくつか紹介していただき紋章の略歴について理解を深めた。ギルドの紋章として最古のものは服地商組合の1438年である。本来騎士の武具であった紋章は荣誉やステイタス・シンボルの色彩を帯びていくが、個人のものであり続けた。それが、15世紀にして団体が紋章を持ち始めると、血縁関係を越えたつながり、つまり所属の意味も付加された。また、一体どのようなギルドの紋章であるのかがすぐにわかるようにサポーターやクレストが業務に関わるものが採用され、紋章のデザインの幅を広げたように思われる。



ギルドホール  
撮影者：森野

## ソールズベリー大聖堂

### [概要]

ロンドンから約 55 キロ離れた南西部にソールズベリーという小さな町がある。ロンドンからは列車で約一時間半かかる。車窓から見る景色は牧草地と畑が続く田舎らしい風景であるが、ソールズベリー近郊にストーンヘンジの遺跡があることから、町は小さいながらも賑わいを見せる。

### [イングランド最初の紋章]

駅から南東に少し歩くとすぐにソールズベリー大聖堂の尖塔を見ることができる。この大聖堂は 36 年という短期間のうちに建設が完了<sup>6</sup>した。そのため、通常大聖堂は何世紀にも渡って建設されるのでいくつもの建築様式が見受けられるが、ソールズベリー大聖堂はイギリス・ゴシック建築に建築様式が統一されている。その美しさは、フランス人で中世建築の権威として知られているピュージン<sup>7</sup>が「ヨーロッパの寺院のほとんどを調べたが、このような寺院はかつて見たことがないし、その巨大さ、周囲の広さ、先頭の高さと優美さ、すべてにおいてライヴァルがない」と絶賛したほどである。実際、大聖堂の四方は手入れされた芝生に囲まれており悠然さが助長され、どの方面からも大聖堂を美しく見ることできた。

寺院の身廊南側にウィリアム・ロンゲペーの墓石(図②)が安置されている。彼はマグナ・カルタで有名なジョン王の異母兄弟であり、ソールズベリー寺院最初の埋葬者である。加えて、彼の墓像の楯に彫られている六頭のライオンはイングランド最初の紋章であると言われている。

紋章の定義は諸説あるが、私は J.P. ブルック・リトル著の『AN HERALDIC ALPHABET』と森護著の『ヨーロッパの紋章・日本の紋章』に倣って紋章とは中世ヨーロッパ貴族社会に始まり名誉の性質を帯びた、個人を識別し得る特定の規則に従ってデザインされた世襲的制度であると定義づけたい。つまり、紋章とは他者へ継承されて初めて紋章となりうるのである。ウィリアム・ロンゲペー以前にも楯に模様を描いた人物は多数確認されているが、いずれも継承されていないため紋章とは呼べないのである。

彼の紋章は戦場における彼我の区別というよりも、子宝祈願の意味が強いようだ。寺院の方に話を伺うと、彼の祖父にあたるアーンジュ伯ジョアフリーが父ヘンリー I 世から男子出生の強い期待が込められた六頭のライオンを刻んだペンダントを譲り受けたことが始まりで、ジョアフリーはこれ以降青色に金の六頭のライオン<sup>8</sup>を描いた楯を使用したという。そして、ジョアフリーの娘とヘンリー II 世との非嫡出子がウィリアムであり、青地に六頭の金のライオン(図①)がウィリアムの墓像(図②)に見ることができるのである。



ソールズベリー大聖堂  
撮影者：森野

<sup>6</sup> 1258 年の献堂式の時点で完成していたのは、身廊、翼廊、聖歌隊席である。参事会会議室は 1278 年、中央尖塔は 1365 年に完成した。

<sup>7</sup> イギリスの建築家。1812 年 3 月 1 日 - 1852 年 9 月 14 日。

<sup>8</sup> 豹であるとも言われている。



また、大聖堂のオーディオガイドではウィリアムを最初の紋章使用者ではなく、単に寺院で最初に埋葬された人物であるとだけしか紹介していないことから、紋章使用の起源を断定するのは難しいことが伺える。説明づけるものがないだけで、ウィリアムより以前に紋章を使用した人物がいるのかもしれない。最初の紋章使用者がウィリアムでないにせよ、観光客によって刻まれる訪問記念のイニシャルや日付が貴重な歴史的重要な文化財を劣化させていたので残念であった。



図② ウィリアム・ロンゲペーの墓像



ジョアフリーの図  
 撮影者：ソールズベリー大聖堂  
 Stephen Dunn 氏



THIS illustration of the original decoration is based on the remains of colour found during conservation work carried out in 2017. It was discovered that the effigy had been painted twice in medieval times with what could be a layer of builders' blue between the two layers of paint. The tomb is unusual in that the effigy is of stone and the tomb chest is of timber used in a fine example of its period.

ウィリアム・ロンゲペー  
 の墓像/説明文  
 撮影者：森野

## ウィンザー城

### [概要]

ロンドンから西に40キロ離れたところにエリザベス二世女王陛下の公邸の一つであり、現役の城として世界最古であるウィンザー城がある。女王の在城時や王室の実務が行なわれていないときは城内の一部を見学することができる。

### [ガーター騎士団と天皇旗]

城内にはエドワード三世によって創設されたガーター騎士団の本拠地であるセント・ジョージ・チャペルがある。このチャペルの中央祭壇の左右にガーター騎士団の座席が設けられている。座席上部にはガーター騎士団員の紋章旗が設置されてあった。ここでは、日本の天皇旗も掲



げられている。チャペルのスタッフに騎士団員である天皇の紋章について話を伺ったところ、天皇旗は厳密には紋章学的ではない<sup>9</sup>という。というのも、日本には学問として紋章が体系的に整えられていないため、紋章学が存在しないからである。しかし、天皇の菊紋が紋章ではないにせよ、西洋紋章学に則った紋章が並ぶ公的な場所で天皇が菊紋を用いることは日本人としての強い意志の表れといえよう。

そもそもガーター騎士団とは、アーサー王の伝説に強い憧れを抱いていたエドワード三世がクレシーの戦い<sup>10</sup>での勝利を記念して、騎士道の高揚を目的として創設した騎士団である。現在では騎士団員に与えられる勲章は英国最高であり、騎士道云々よりも栄誉と親交を示すものとなっているようである。

天皇旗として用いられている菊紋は、平安時代に貴族の間で流行った文様であった。後鳥羽上皇が菊をたいへん気に入られ、調度品にこの文様をつけられ、それが代々受け継がれていき、天皇家の紋章となったという。

チャペルと同様に城内のセント・ジョージズ・ホール天井にも設立当初から続くガーター・ナイトの紋章プレートが飾られている。ここでもスタッフに話を伺うと、明

セント・ジョージ・チャペル内にて天皇旗の説明

撮影者：森野

治天皇・大正天皇・昭和天皇・今上天皇と四代に渡り、ガーター勲章が贈られたとのことであった。紋章学上、同一紋章は禁止されているためどのプレートも異なっているのであるが、四つの菊紋は非常に酷似していた。また、昭和天皇は一度、大戦中に除名されたのであるが、戦後再び叙されており、これは他に例がないという。様々な政治的思惑が含まれているとしても、天皇が騎士団員であることは日本とイギリスとの友好関係を示しているといえよう。(城内撮影禁止)

<sup>9</sup> 紋章の定義は諸説ある。ここでは紋章とは中世ヨーロッパ貴族社会に始まり名誉の性質を帯びた、個人を識別し得る特定の規則に従ってデザインされた世襲的制度であると、定義するため家紋も紋章とする。

<sup>10</sup> 百年戦争下、1346年北フランスのクレシーCrécyで行われたイングランド王軍とフランス王軍との戦い。

## オックスフォード大学

### [概要]

オックスフォードはロンドンから北西に90キロ離れたところに位置するイギリス最古の大学都市である。約35のカレッジが市の中心にある。長い歴史を持つカレッジは美術館や博物館、図書館とともに現役の施設であり映画『ハリー・ポッター』シリーズのロケ地であることも加わり、学生と観光客で賑わっている。



### [カレッジの紋章]

オックスフォード大学におけるカレッジとは、つまり寮を備えた学部である。現在でもカレッジ毎に入学者選別試験を行い、独自の文化財を所有し各自博物館運営を行っている。カレッジが一つの独立した学校のようにあり、紋章もカレッジ毎に異なる。

古いカレッジは13世紀に創設され、最も新しいカレッジは2008年に創設された。カレッジの紋章はそのカレッジの創立者に因んだものから作られることが少なくない。初期の大学において、教授と生徒の関係はギルドのような徒弟関係であったため、ギルドと同様にカレッジ毎に独自の紋章を持ったのであろう。さらに、しばしば海外では大学よりも、何を専攻したのかが重視されると耳にしたことがあり、カレッジが紋章を持つことで証明書の発行にも役立ったと思われる。日本の大学では校章はあるものの学部毎のしるしはないので、改めてイギリスと日本の学校の在り方の違いを再認識させられた。

現役の大学であるため入場制限が設けられていた。13世紀の建物で学ぶことで自ずと物を手入れして長く大切に使うという精神を養っているように感じた。イギリス最古の大学であり、かつ世界的にもトップクラスの大学であるのは、おそらく古い伝統も学びつつ新しい技術を取り入れているからではないかと思われた。

ここでも、個人の識別のための紋章ではなく、団体/組織を示すシンボルとして紋章が息づいていることがわかる。



カレッジ毎に異なる紋章の例  
引用元：参照に URL 記載



## テンプル・チャーチ

### [概要]

映画『ダ・ヴィンチ・コード』で有名になったこの教会は通常の教会とは異なり、西側がイェルサレムの聖墳墓教会の様式が採用され、円形に設計されている。というのはこの教会がテンプル騎士団ゆかりの地であるからであろう。この教会は当初、1099年に十字軍によって奪回に成功した聖地イェルサレムとパレスチナへの巡礼者を庇護する目的で設立され、テンプル騎士団のイングランド支部として用いられた。騎士団の解散後は法律家によって組織されるテンプルと呼ばれるギルドの教会として現在でも使用されている。

### [初期の紋章]

建築様式や教会の歴史だけでも非常に興味深いのが、堂内に安置されている墓像にも注目したい。第二次世界大戦中の空襲によりテンプル・チャーチも被害を受けたが、墓像は修復され現在でも当初の姿を見ることができた。両足をX字状に組んでいる墓像は十字軍遠征に参加した証拠である。この教会には9体の墓像が安置されており、そのうち数体の墓像が両足を組んでいた。また、5体の墓像は楕円の紋章図形から騎士の名前が確認されたという。このことから、紋章を用いることで個人を容易に特定できることがわかった。また、教会内部にはテンプル騎士団とテンプル教会の歴史についてパネルが設置してあり、訪問者が学べるように工夫されていた。



円形ドーム  
撮影者：森野



両足をクロスし  
ている墓像  
撮影者：森野



紋章から誰の墓なのかわかった例  
ウィリアム・マーシャルの墓像  
撮影者：森野

## まとめ

本研究によって紋章が時代の変遷に伴ってその存在意義が移り変わったことが明らかになった。

中世イングランドでは人々は生まれた場所によってその後の人生がある程度決まっていたと思われる。たとえば、農村に生まれた子どもは成長すると、他の選択肢がないため両親と同じように百姓となり、貴族の家系に生まれた子どもは同様に両親と同じような貴族となった。このことは身分制社会であれば至極当然のことだろう。現代のように食料の供給が安定しておらず、医療技術が進んでいなければ、共同生活をせざるを得ない。すると共同体を円滑に運営するために自ずと規則が生まれ、違反する人は制裁された。そうして、独創性や個性は必要とされなかった。つまり、中世において近代的な〈個人〉は存在しなかったのである。そういった状況のなかで〇〇と△△の子である□□というように、家族という一つの共同体に属する存在を示すものとして紋章が普及したのではないだろうか。

加えて、当初は戦場で敵味方を判別するためであった紋章のデザインも貴族好みに次第に華美なものへ変化し、体系的に紋章制度が整えられた。そして、紋章院から紋章を発行してもらうにあたって、ある程度のまとまった金額が必要となると、さらに人々の自己顕示欲を刺激したであろう。近代イングランドを実質的に支配したジェントルマンになるためには、不労所得があること、ジェントルマンらしい生活をしていることと、紋章を保有することが条件であったという。ジェントルマンとは法的身分ではなく貴族とジェントリから構成され、他者からの判断によって認められる特殊な階層であった。ジェントルマンであるか否かを判別する際に最も重要視されるのは〈ジェントルマン的な生活の中で出生すること〉であったが、努力次第でジェントルマンの仲間入りを果たすことができる可能性があることは人々の上昇志向を刺激し、社会的流動性を高め、イングランドの発展に寄与したと考えられる。このジェントルマン枠に入るための必須条件としての紋章の需要もあったと思われる。

しかし、宗教革命・市民革命・産業革命の三つの革命を経て、社会構造が大きく変化した。結論から述べるとその変化とは〈個人〉の誕生に行き着くだろう。中世は迷信・慣習の横行や身分制などの多くの制約がある負の面と、共同体ならではの連帯感やそれに付随する精神の安定感をもたらすという正の面の二つの側面があった。中世から近代、そして現代へ向かうにつれて人々は中世の負の面から脱却を試み、自由を勝ち取ってきたが、正の面を手放し、孤独感に苛まれるようになったのである。そうして、安定感や帰属感を取り戻すために獲得した自由を放棄して再び組織へと自らを組み込むのである。それが、ギルドや学校、都市といった団体の紋章として表れているのではないだろうか。

紋章を取り巻く状況は大きく変化し、それに伴って紋章の存在意義も転換を迎えたように思われる。紋章が自分の出生を語るのではなく、自分が選択し所属する団体や組織を語るようになったのだ。紋章が所有者の表象であることは今も昔も一貫して変わらないが、生まれつき定められた紋章かそれとも、自ら選択した紋章かといった目に見えない部分は全く別物である。

存在意義が変化してもなお、紋章がイングランドのいたるところで目にすることができることは、まさに中世的な伝統と現代社会との融合の姿であるといえよう。

また、日本では冠婚葬祭の時などしか家紋を見る機会がなく、家紋の存在が疎遠になっている一方で、イングランドでは紋章が身近なものであることを痛切に感じた。家紋が西洋の紋章制度のように学問的にまとまっていないからといって、劣っているというわけではないだろう。黒と白で描かれる<sup>11</sup>家紋の美しいデザインは海外からも高い評価を得ている。

家紋と紋章の大きな違いとしてしばしば、表す対象が〈家〉か〈個人〉かの違いがあげられる。しかし、武士は個人単位で家紋を使用したという記録が残っており、必ずしも〈個〉を大事にするか否かの文化の違いである

---

<sup>11</sup> 村紺、裾紺、黄紫紅、水色桔梗、白黒一文字など彩色されているものもある。

と説明できない。デザインや制度は異なるものの両者共に 11 世紀に誕生し、継承性を備えている側面から考えても西洋紋章と家紋は類似するだろう。つまり、色やデザイン、〈個人〉か〈家〉どちらを重視するかの違いはあるが、自己を示すという根本的な部分は同一であるといえる。

ただ、イギリスが勲章制度に紋章が結びつき、〈名誉〉を誇示する存在へとなった点と、日本は全く関係のない人同士でも同一紋章を用いることがある点は相違点としてあげられ興味深い。

では、一体なぜイングランドでは紋章が時代とともに生き続けながらも、家紋は昔のものとして忘れ去られつつあるのだろうか。おそらく、そこには幕末から明治にかけての開国が大きく関わっているのではないだろうか。開国以前は血縁関係が重視され、親戚づきあいは年中行事の度に行われたが、開国後は家族の在り方が変化し、昨今では親戚関係が希薄になりつつあることが指摘されている。開国を境とした家紋の在り方の変化は日本における家族の概念の変化と呼応すると思われ、これを調査することは今後の課題である。

共同体から解放され自由を獲得した私たちは断片化された社会を生きていかなければならない。そこでは、自分とはどのような人間であるのかアイデンティティを持つことが求められるだろう。過去から現在に至る歴史の中に自分を位置付けることで明確な自己を確立することができる。紋章を巡る歴史から見えてきたことは、現在にいる私たちの歴史的な姿であった。紋章を通して過去から受け繋がれたものを自分の中に実感できるだろう。

## 参考文献

井野瀬久美恵『イギリス文化史入門』昭和堂、1994。

山本正編『ジェントルマンであること—その変容とイギリス近代』刀水書房、2000。

森護『英国紋章物語』三省堂、1985。

森護『西洋紋章夜話』大修館書店、1988。

森護『ヨーロッパの紋章・日本の紋章』河出書房新社、1999。

浜本隆志『紋章が語るヨーロッパ史』白水社、2003。

堺憲一『新版あなたが歴史と出会うとき』名古屋大学出版会、2009。

丹羽基二『家紋一千五百種の美と歴史』秋田書店、2001。

J. P. Brooke-Little, AN HERALDIC ALPHABET (Robson Books, 1997)

<http://japanknowledge.com>,

<http://www.linacre.ox.ac.uk/>

<https://www.merton.ox.ac.uk/>

<http://www.wolfson.ox.ac.uk/>

<http://www.weblio.jp/content>